

平成 21 年 5 月 8 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007 ～ 2008
 課題番号：19791652
 研究課題名（和文）新卒臨床看護師の視点による学生臨地実習時に看護技術を体験する意義
 研究課題名（英文）Experience with Nursing Techniques during On-Site Clinical Practicum
 -The Viewpoint of Graduate Nurses-
 研究代表者
 師岡 友紀（MOROOKA YUKI）
 大阪大学・大学院医学系研究科・助教
 研究者番号：40379269

研究成果の概要：看護基礎教育の臨地実習で「身体侵襲を伴う看護技術」を実施することは、新卒看護師にとってどのような意義があるか検討した。対象者175名のうち103名の同意を得、3ヵ月後・6ヵ月後・1年後に調査を行った。結果、身体侵襲を伴う看護技術を実施した場合、実施した技術に対する自己評価が高まるが、その傾向は全ての技術に当てはまらないこと、身体侵襲看護技術の経験のない場合はある場合と比較し就職1年後の離職願望が強いことが示された。実施の意義として「技術向上のための学習意欲が増す」と評価する割合が大きかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	0	1,800,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	150,000	2,450,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護技術・技術教育・臨地実習

1. 研究開始当初の背景

従来、臨地実習時に看護学生が患者に対して看護技術を施行することによってのみ獲得される能力があることに異論はなく、看護技術は実施してこそ意義があるとされてきた。しかし、医療安全確保のための取り組み強化や患者の人権意識の高まりなどにより、看護師免許を持たない学生が実習中に看護技術を実施する機会は次第に限定的なものとなっている。そのことで、近年、臨床現場が新卒看護師に期待する看護技術レベルと

実情との乖離していることが問題視されている。

厚生労働省で検討会が発足するなど臨地実習体制整備は既に行われつつある。しかし、看護技術を学生時に実施する意義は未だ明らかになっていない。「患者の個別性の理解」など教育的意義としてあげられるものの、そのエビデンスは明確でない。

身体侵襲を伴う看護技術の実施にあたっては、患者のリスクを上回る教育上のベネフィットが必須であるため、学習効果や意義を

明らかにしていくことが急務である。新卒看護師の教育環境整備や看護師教育4年化が検討されている中、学生時の実習で何を目標とするのか検討するためにも実証的な調査は必須である。

そこで本研究では、臨床と基礎教育のギャップに直面すると考えられる新卒看護師を対象として、学生が患者の身体に侵襲を伴う看護技術を実施することはどのような意義があるか検討する目的で調査を行った。

2. 研究の目的

身体侵襲を伴う看護技術の実施経験の有無により、就職直前の個々の看護技術の自己評価に差異が生じるか、卒後3ヵ月・6ヵ月・1年の認識にどのような差異が生じるかを検討するとともに、新卒看護師が「身体侵襲を伴う看護技術の意義」をどのように認識しているか実態を明らかにした。

3. 研究の方法

(1)対象：A大学附属病院に就職した新卒看護師

(2)手続き：病棟配属前の対象者に説明依頼書一式を配布し研究の目的・方法を説明した。同意が得られた対象者が就職直前に回答していた看護技術に関するアンケートの回答を閲覧してデータ収集するとともに、病棟配属3ヵ月後・6ヵ月後・1年後に自己記入式質問紙を郵送し、郵送により回答を求めた。

(3)調査内容

①対象者が就職直前に回答していた看護技術に関するアンケート（A大学附属病院看護部作成保有）のうち、身体侵襲を伴う看護技術20項目の実施経験の有無と学習経験の詳細（見学・学内演習の状況など）、および各看護技術の到達感の自己評価（4段階評定）。なお、身体侵襲を伴う看護技術は次の20項目とした。「経鼻胃管カテーテルの挿入」「流動食の注入」「浣腸」「一時的導尿」「膀胱留置カテーテルの挿入（女性）」「口鼻吸引」「気管吸引」「採血」「血糖測定」「皮内注射」「皮下注射」「筋肉注射」「輸液準備（ルートの作成）」「輸液ボトル交換」「ピギーバック法」「血管確保の介助」「輸液ポンプ操作」「シリンジポンプ操作」「創処置介助」「坐薬の挿入」

②3ヶ月後・6ヶ月後・1年後の調査項目

・「求められる看護技術レベルとギャップを感じる程度」（5段階評定）

・「自立度」（5段階評定）

・「看護技術が悩みとなる程度」（6段階評定）

・「看護技術が仕事を辞める原因になるかどうかの程度」（6段階評定）

・「臨地実習時の経験がどのくらい役立っているか」（4段階評定）

・臨地実習時の看護技術の実施に対してどのように考えるか（2項目・3段階評定）

③3ヶ月後、1年後の調査項目

・働いている中での願望（計12項目・7段階評定）：「もっと自由になる時間がほしい」「配属病棟（部署）を変えてほしい」「仕事量を減らしてほしい」「もっと患者様に認められたい」「看護師養成の学校教育を改善してほしい」「夜勤回数を少なくしてほしい」「もっと職場の上司（先輩）に認められたい」「仕事中にサポートしてほしい」「違う病院に再就職したい」「もっと看護技術を学習したい」「卒後、就職してからの教育を改善してほしい」「看護師をやめたい」

・働いている中でのギャップ（計7項目・7段階評定）：「想像以上にやりがいを感じている」「想像以上に身体的負担を感じている」「想像以上に患者様と接するのが楽しい」「想像以上に患者様と接するのが難しい」「想像以上に多忙である」「想像以上に精神的負担を感じている」「想像以上に充実した日々を送っている」

④1年後の調査項目

事前の看護師20名を対象とした予備調査にてリストアップした「看護技術の意義（計10項目）」に関してどの程度自分自身に当てはまるか6段階で回答を求めた。

なお、②～⑤は研究者間で検討を重ね独自に作成した。

(4)倫理的配慮：研究者内に対象者の上司が含まれたため、対象者が研究参加への圧力を感じる恐れがあった。そのため、自由意思による研究参加であることを強調し、所属の異なる研究者のみが研究参加の有無に関する情報を管理することを説明した。なお、本研究の手続きは、大阪大学保健学倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

対象者175名のうち103名の同意を得た。

(1) 学生時の看護技術の実施経験と就職直前の個々の看護技術の到達感自己評価

95名を分析対象とした。看護技術の実施経験と看護技術の自己評価の関連性を統計的に分析した結果（ χ^2 検定またはFisher直接確率）、20項目中15項目で、臨地実習時の実施経験がある場合はない場合と比較し到達感が高いことが示された。同様の分析を、臨地実習時の見学経験、人形等シミュレーターの実施経験、学生同士の実施経験に関して行ったところ、それぞれ経験状況により有意な差が見出される看護技術項目は異なっていた。このことから看護技術の自己評価に関連ある要因として、臨地実習時の実施経験だけでなく他の経験も関連していることが示唆された。ただし、全ての項目で有意差が認められなかったこと、経験状況による差異が認められたことから、技術項目に依存する何らかの特性が到達感に影響する可能性が示唆

された。

(2) 看護技術に関する認識一般

3ヶ月後(分析対象59名)、6ヶ月後(55名)、1年後(61名)を、それぞれ、学生時の身体侵襲を伴う看護技術の経験の有無により群分けし、(3)の調査内容②に関して認識の差異を検討した。しかし、いずれの時期・項目においても有意な差異は見出されなかった。このことから、ギャップを感じる程度、自立度、看護技術に関する考え方一般、臨地実習の役立ち度は、学生時の実施経験の有無により必ずしも差異が見出されないことが示された。

(3) 働いている中で願望やギャップとの関連(表1・表2参照)

それぞれの質問項目回答の傾向を2群に分ける目的で、同意しない群として「全くそう思わない」「ほとんどそう思わない」「あまりそう思わない」、同意する群として「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ある程度そう思う」とした。「どちらとも言えない」との回答は除外した。

3ヶ月後の調査では59名を分析対象とした。学生時に身体侵襲を伴う看護技術経験の有無により「経験あり」群、「経験なし」群とし、就職3ヶ月後に差異が認められるか χ^2 検定(またはFisher直接確率)にて検討した。結果、いずれの項目にも統計的な差異は認められなかった。

1年後の調査(分析対象61名)に関しても同様の手続きで、「経験あり」群「経験なし」群に分けて分析を行ったところ、「違う病院に再就職したい(p<.05)」と「看護師をやめたい(p<.01)」の項目に有意な差が見出され、「経験なし」群は「経験あり」群に比較して離職願望とも考えられる項目で差異が示された。

このことから「ギャップ」や「願望」に関し学生時に身体侵襲を伴う看護技術の経験の有無により、卒後3ヶ月後までは差異が見出されにくいものの、卒後1年では差異が顕在化しやすいと考えられる。ただし看護技術の実施経験による差異か、ある特性をもった集団が臨地実習中より看護技術実施を回避しているのかは不明である。また、「配属部署(病棟)を変えてほしい」との要望では差異が見出されなかったことから、もともとの進路選択の状況による影響も否定できない。

学生時の看護技術の実施経験と離職願望との関係や、なぜ3ヶ月後には差異が見出されず1年後に見出されるのかなど、さらに検討を重ねる必要がある。

表1. 別の病院に再就職の要望の有無と学生時の侵襲技術経験

		思わない	思う	計
侵襲技術経験の有無	経験あり	29	14	43
	経験なし	2	8	10
合計		31	22	53

表2. 看護師を辞めたいとの要望の有無と学生時の侵襲技術経験

		思わない	思う	計
侵襲技術経験の有無	経験あり	24	13	37
	経験なし	2	7	9
合計		26	20	46

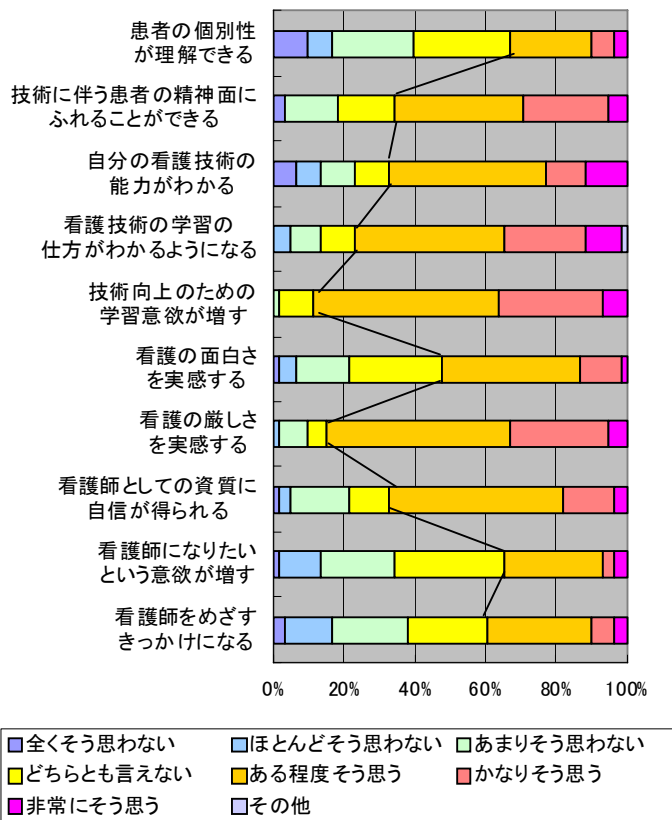
(4) 臨地実習中の身体侵襲を伴う看護技術の意義(図1参照)

1年後の調査に参加した61名を分析対象とした。身体侵襲経験の有無によりいずれの項目にも有意な差異が見出されなかったため、分析対象を群分けすることなく集計した。

最も「そう思う(非常にそう思う・かなりそう思う・ある程度そう思う)」と回答した割合の大きかった項目は、「技術向上のための学習意欲が増す」であり、続いて「看護の厳しさを実感する」「看護技術の学習の仕方がわかるようになる」といった回答に同意する割合が大きかった。一方、「患者の個別性がわかる」という項目に同意した回答の割合は相対的に低かった。身体侵襲を伴う看護技術を実施する意義として先行研究では「個別性の理解」があげられていたが、今回の結果はそれを支持するものではなかった。

統計的な差異の検討はしていないが、これら実態調査の結果は今後、身体侵襲技術の実施をうながす際の、教育目標を検討する際に考慮すべきと考えられる。

図1. 臨地実習時に身体侵襲を伴う看護技術を実施する意義



5. 主な発表論文等

[学会発表] (計4件)

①師岡友紀, 谷浦葉子, 三木佐登美, 小林珠実, 福録恵子, 鈴木純恵, 梅下浩司; 新卒看護師における「看護技術の影響」と臨地実習時の看護技術経験の意義に関する認識の変化, 第28回日本看護科学学会学術集会, 2008年12月, 福岡市.

②師岡友紀, 谷浦葉子, 三木佐登美, 小林珠実, 福録恵子, 鈴木純恵, 梅下浩司; 学生時の身体侵襲を伴う看護技術経験の違いによる就職後の意識の差異, 日本看護学教育学会第18回学術集会, 2008年8月, つくば市.

③師岡友紀, 谷浦葉子, 三木佐登美, 小林珠実, 福録恵子, 鈴木純恵; 臨地実習時の身体侵襲を伴う看護技術の経験について(2) - 新卒看護師の臨地実習に対する意向の分析から - 第27回日本看護科学学会学術集会 2007年12月, 東京.

④師岡友紀, 谷浦葉子, 三木佐登美, 小林珠実, 福録恵子, 鈴木純恵; 臨地実習時の身体

侵襲を伴う看護技術の経験について(1) - 経験状況と到達度評価の関連性の検討 - 第27回日本看護科学学会学術集会 2007年12月, 東京.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

師岡 友紀 (MOROOKA YUKI)

大阪大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号: 40379269

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

谷浦 葉子 (TANIURA YOUKO)

大阪大学・医学部附属病院・看護師長

三木 佐登美 (MIKI SATOMI)

大阪大学・医学部附属病院・看護師長